ほんまてるお
本間照雄

学位の種類	博士（文学）
学位記番号	文博第 371 号
学位授与年月日	平成23年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	東北大学大学院文学研究科（博士課程後期3年の課程） 人間科学専攻
学位論文題目	**社会関係の再構築としてのケア改革**
論文審査委員	（主査） 教授 長谷川 公一　教授 吉原 直樹 教授 正村 俊之 准教授 永井 彰 准教授 下夷 美幸 准教授 辻本 昌弘

論文内容の要旨

目次

はしがき……i

序　章　研究の目的と意義……1
　第1節　「関わり合い，向かい合う」ことへのまなざし……2
　第2節　本論文の主題設定と研究方法……13
　第3節　本論文の構成……15

第1章　ケアの質……19
　はじめに……19
　第1節　政策提言と制度改正……19
　第2節　ケアの質の向上を図る取り組み……28
　第3節　ユニットケアの取り組み……40
　第4節　個別ケアを追求するケアの質……48

第２章　地域を取り込むケア（特別養護老人ホーム「杜の風」の事例から）……55
はじめに……55
第１節　対象地の概要と対象施設の現状……56
第２節　民生委員児童委員との関わり……66
第３節　地域住民と一緒に祝う敬老会……81
第４節　施設入居者が地域活動として参加する交通安全街頭啓発……88
第５節　終の棲家を目指す施設での看取り……95
第６節　地域を取り込むケア……105

第３章　地域と協同で進めるケア（特別養護老人ホーム「うぐいすの里」の事例から）……115
はじめに……115
第１節　対象地の概要と対象施設の現状……116
第２節　住民参加の施設づくり……122
第３節　協同で進める児童と高齢者の相互訪問……126
第４節　友達になった高齢者のお焼香に行った中学生……138
第５節　地域福祉の人財育成……144
第６節　地域と協同するケア……149

第４章　年齢や障害の程度を越えたケア（グループホーム「ながさか」の事例から）……153
はじめに……153
第１節　事業化の経緯とその背景……154
第２節　モデル事業で試みる新たな生活の場づくり……156
第３節　認知症高齢者と知的障害者の関わり合い……158
第４節　モデル事業から一般事業化へ……172
第５節　制度を越えるケア……176

第５章　先駆的ケア実践が導く地域生活の実像……179
はじめに……179
第１節　近隣者との関わりで見つけた終の棲家……180
第２節　自宅と施設の二つの生活空間を持つ夫婦の暮らし……200
第３節　二人の知的障害者の日常……210
第４節　先駆的ケア実践が導く地域生活……224

終　章「関わり合い，向かい合う」ことが拓く新たな地平への助走……231
はじめに……231
第１節　先駆的ケア実践の特徴と主眼点……231
第２節　社会関係としてのケア……238
第３節　本論文の総括……245

謝　辞…… 255

参考文献…… 257

初出一覧…… 265

補足資料…… 267

1　本論文の目的

これまで，介護現場の内外では，常に「ケアの質」の向上に関する議論が交わされてきた。この議論の多くは，集団処遇（流れ作業による画一的定時業務）から個別処遇への転換として語られている。個別処遇を言い表す言葉として，「寄り添うケア」や「個別ケア」といった表現が用いられ，物扱いから個々人のニーズに合わせた介護への転換がケア改革の主たる視点となっている。しかしながら，ケアの質に関する議論や取り組みがいかなる言葉を使って行われようとも，依然として身体介護を対象とした視点で語られ取り組まれ続けていることには，大きな違和感を持つ。なぜなら，ここで言われるケアの質は，高齢者の身体的・精神的・社会的能力の「低下や不足」の側面に着目したものだからである。ケアの質が身体面に終始し，生活者としての日常の確保から目が離れている感がある。

一方，本論文で取り上げる施設の取り組みには，提供者（施設）と利用者（本人・家族）及びそれを取り囲む地域住民相互の活発な関わりが見て取れる。ここでは，これまで多く見られた介護職員と利用者間の介護を介した関わりに終始しない多様な関係性の中でケアが行われ，ケアの質に対する視点に大きな違いを見ることができる。

このため，これらの相互の関わりとケアの質の向上との関係について現状に即して把握し，これらの社会関係を切り口にしながらケア改革の要因を浮き彫りにしていくことで，これまで持っていたケア改革に対する違和感に何らかの答えを見いだし，これから求められるケアの質のあり方に接近できるのではないか。また，そのことが多くの市民の目に触れる状況をつくりだすことで，さらなるケア改革への弾みになるのではないかと考える。

このように，さまざまな社会関係に大きな変化をもたらしていくケア現場での振る舞いについて，事例をとおして分析しケアの質に求める視点に新たな方向性を見いだすことが本論文の目的である。

尚，本論文は，問題関心を明らかにする手法として事例研究の手法を取っている。この研究手法を取る理由は，本論文の問題関心が介護サービスを間に挟んで，地域住民も含めたサービスの利用者（本人・家族）と事業者との関わりに着目しているからである。なぜなら，両者は，高齢者にとっては生活手段（道具）であり事業者にはサービス（商品）であるケアという具体的な行為をとおして関わり合うことから，その場面に両者のケアと向き合う姿勢をより鮮明に浮き立たせることが可能になるからである。

それぞれの具体的な関わりの様子を知ることは，それぞれの生き方や考え方を知る大きな手がかりとなるもので，それは同時に，今後のケア改革の方向性を見いだす道しるべとなりうるものではないかと考えている。このため，ケア場面における関わり方を具体的生活場面を中心にして切り取ることで，効果的かつ鮮明に両者の姿（生き方や姿勢）を浮き立たせることができると考え，事例研究の手法を採っている。

2　本論文の構成

本論文は，ケアの質の向上を目指すさまざまな取り組みや具体的な暮らしの場面を観察し，そこから浮かび上がる地域生活の現状とその限界に関する事例分析を中心にして検討を進める。

本論文は全体を７章で構成している。

序章は，研究の目的とその意義を述べている。

第１章は，現行制度に直接関わるケアの質に関する議論や現場職員の声を基にして，介護サービスの質の現状を把握し，その上で，ケアの質の視点に大きな影響をもたらしたユニットケアについて触れる。ここで行うのは，これまでケアの質についてどのような検討がなされ，どのような捉え方をしようとしてきたのかを見ていき，現時点でのケアの質を把握し，次章以降の先駆的ケア実践に関する議論をより明確にするための作業である。

第２章は，福祉施設整備計画段階から現在に至るまで，行政と介護サービス事業者（以下「事業者」という）が一体となってさまざまな実践を試み，特別養護老人ホーム等と地域との関わりやケアのあり方を模索する３編の事例で構成している。本章では，事例で示す取り組みが，地域住民の福祉観にいかなる変化をもたらし，事業者のケア観にいかなるインパクトを与えたのかを分析するとともに，行政が関わることの意味を提示する。ここでは「地域を取り込むケア」の典型事例として扱っている。

第３章は，市町村合併後の過疎地域のまちづくり，安全安心の地域づくりを意図して施設整備段階まで行政が関与し，その後は事業者が単独で地域社会との協同を模索し，「地域共有の財産づくり」という独自のケア理念で実践している３編の事例で構成している。本章では，事例で示す取り組みが持つ地域資源としての役割を分析し，社会福祉施設が地域生活の継続や地域生活の安定した基盤づくりを目指すことの意味を明らかにする。ここでは「地域と協同するケア」の典型事例として扱っている。

第４章は，知的障害者の地域生活の実現を「共生」という手法を取って進める事例である。本章では，認知症高齢者と知的障害者が共に暮らす「共生型グループホーム」というケア手法が，地域生活の継続や制度を越える必要性を顕在化させていく過程を整理し，共生という制度を越えたケア手法が，地域で暮らす（脱施設化）ことを支える可能性とその意味を明らかにする。ここでは「制度を越えたケア」の典型事例として扱っている。

第５章は，事例で取り上げた先駆的ケア実践はいかなる成果を生み出しているのかについての一つの答えを示している。これを知る手がかりとして行ったのが，特別養護老人ホーム，認知症高齢者グループホーム，共生型グループホーム及び在宅での個別具体的の日常生活の観察である。本章では，この観察をとおして，具体的な地域生活の様子を把握し，地域生活の現状とその限界を浮き彫りにしつつ，施設が行っている地域や家族が関わるケアの意味を明らかにする。また，そのことをとおして，ケアに多様な他者が関わることの意味とそれによってもたらされるケアの質に対する考え方を変える視点を持つことの必要性を引き出し，終章での議論への橋渡しを行う。

終章は，これまでの議論を下に，第２章から第４章で取り上げた三つの先駆的ケア実践の持つ特徴と主眼点を整理し，従来の介護といかなる違いがあるのかを社会関係の視点でとらえ直し，最後に，そこから本論文の総括となる他者との関わりが導き出すケア改革の持つ今日的意義を見いだし本論文の総括としている。

3　各章の要旨

3-1　序　章

本論文の導入部となる序章では，これまでのケア改革の動向及び主要な調査研究を本論文の主題と問

題関心に即して整理し，次章以降で展開する議論への橋渡しをする。

ここで取り上げる研究者は，ケア改革の研究動向を示すには余りにも少なく偏りがあることは否定しえない。しかし，取り上げた研究者，実践者のいずれもが今日のケア改革を語る上では極めて大きな影響を持った研究者であり，現時点でのケアの質を見る指標となり得るものと考えている。このため，ケア改革に関する研究動向を網羅的にリサーチすることはせず，今日のケアの質を巡る代表的研究者を取り上げている。また，本論文の主な分析対象となる四つの先駆的ケア実践の特徴を概括整理し，論点の明確化を図っている。本章で確認すべき点は，本研究の鳥瞰図を示すことによって本研究の基本的問題関心（主題設定）と本論文の全体構成を明記することにある。

3-2　第１章

第１章は，現行制度に直接関わるケアの質に関する議論及び介護サービスの質の向上を図って行われたサービス評価事業並びにケアの質の視点に大きな影響をもたらしたユニットケアについて触れ，ケアの質について，どのような検討がなされ，どのような捉え方をしようとしてきたのかを見ていく。ここでは，これから取り上げていく具体的な先駆的ケア実践でのケアの質との違いを理解しやすくするために，これまでのケア実践においてケアの質をどのように捉えようとしてきたのかについて把握しようとするものである。

はじめに，ケアの質に関わる政策提言や制度改正の経過を振り返り，それらの中で，ケアの質はどのように扱われていたのかを把握する（第１節）。さらに，ケアの質の向上を図るために行われた評価事業や介護現場で働く職員の声などをとおして，ケアの質の現状を把握する（第２節）。その上で，現在，最も進んだケアとして全国的に行われているユニットケアについて触れ，現時点で到達しているケアの質を把握する（第３節）。これまで行われてきたケアの質の向上を図る取り組みを把握し，現時点では個別ケアをもって質の高いケアとしていることを把握した（第４節）。これらの作業は，現時点で多く行われているケアの質の向上を図る取り組みと次章以降で取り上げる先駆的ケア実践事例の持つ違いを浮き彫りにするために行うものである。

3-2　第２章

第２章は，宮城県初の新型特別養護老人ホームとして開設した特別養護老人ホーム「杜の風」を中心とした老人福祉施設が集まっている「とうみやの杜」が取り組む先駆的ケア実践の事例を取り上げている。本施設の特徴は，ユニットケア，地域密着型サービス（認知症高齢者グループホーム）といったハード的環境を率先して整えるとともに，福祉施設整備計画段階から現在に至るまで，行政及び地元自治会と一体となって地域にあるありふれた社会資源を施設ケアの中に取り込むことで，ケアの質の向上を図ろうと模索しているところにある。本章の課題は，行政及び民生委員児童委員（以下「民生児童委員」という）の協力を得ながら進めている，地域住民との関わりを生かした（取り込んだ）ケア手法に着目し，生活感のある施設ケアがいかにしてつくりあげられていったのかを明らかにする。その上で，その中で行われているさまざまな関わり合いや向かい合いがつくり出そうとしている新たなケア関係の持つ意味について論じる。また，その際，民生児童委員を取り込み，地域との関わりをケアの質の向上に組ませようとしている地元行政の果たした役割についても触れる。

これらの課題に取り組むために，まず，第１節では対象地及び対象施設について概観する。第２節では施設ケアに地域との関わりを取り込む大きな役割を果たしている民生児童委員の活動を取り上げる。第３節以降では研究対象施設で行われている三つの特徴的事例を分析する。第３節は，介護の必要性や

移動の困難さなどの理由から施設内で行われることの多い施設主催の敬老会ではなく，地元市町村主催の敬老会に参加している事例である。この事業を特徴的事例として取り上げるのは，多大な労力を使いながらも地元富谷町や隣接する町村主催の敬老祝い事業に参加する意図やこのような事業をとおして地域社会との関わりをケアの中に取り込む意味をどこに見いだしているのかなど，社会資源との関わり方を知ることができると考えたからである。第4節は，介護施設の入居者が毎年春と秋に行われている交通安全県民総ぐるみ運動街頭啓発に参加している事例である。この事業を特徴的事例として取り上げるのは，施設入居高齢者が社会参加することを支える意図や参加した高齢者がそのことをどのように受け止めているのかなど，社会的役割との関わり方を知ることができると考えたからである。第5節は，施設入所や在宅を問わず最期は病院で迎えることが多い中で，介護施設で最期を迎えようとした施設での看取りに関する事例である。この事業を特徴的事例として取り上げるのは，施設という空間を介護の場としてではなく生活の場という在宅とほぼ同意語として捉え，関わりの深い人達に見守られながら死を迎えることを支える中で，施設という空間をどのように捉えようとしているのかを知ることができると考えたからである。第6節では，これらの事例から浮かび上がってくる特徴をまとめ，本事例の先駆性を「地域を取り込み生活者としての振る舞いを引き出すケア」に見いだしている。

本章で明らかにしたのは以下の内容である。「杜の風」では，ケアの質を身体介護を中心とした介護技術の向上を図る視点ではなく，行政や地域住民などの社会資源の支援を受けながら施設の中に地域を取り込み，生活者としての振る舞いを引き出すことに置いている。その振る舞いは，自立的生活を促すとともに，他者に対する新たな振る舞いを促している。地域を施設生活の中に取り込むことは，介護という日常的なケアをつうじて，依存的になりやすい施設生活を改め，地域で暮らしていたときのような自立的生活環境に再構築することを意図したところにケアの視点がある。

3-3　第3章

第3章は，地元自治体が，市町村合併後の過疎地域のまちづくり，安心安全の地域づくりを意図して誘致した特別養護老人ホームが取り組む事例である。本施設は，施設整備段階までは行政が関与したが，開設後は新市となったこともあり，事業者が単独で地域社会との共同を模索し，さまざまな実践を試みている。本施設の特徴は，地域との協同を進める過程で「地域共有の財産づくり」という独自のケア理念を打ち立て，施設を地域に積極的に開放するとともに，地域の社会資源との協同によるケアの実践を試みているところにある。本章の課題は，地域の社会資源と協同で進める取り組みが，住み慣れた地域での暮らしの継続や安全安心のある地域づくりに，いかなる役割を果たそうとしているのかを明らかにするところにある。

これらの課題に取り組むために，まず，第1節では対象地及び対象施設について概観する。第2節では本施設の特徴を生み出している住民が参加した施設づくりを取り上げる。第3節以降は研究対象施設で行われている三つの特徴的事例を分析する。第3節では，近隣の小学校との協同により施設入居高齢者の役割づくりと小学校の授業（総合的学習の時間）として行われている節分・ひな祭り交流に関わる事例である。ここでは，介護施設と地元小学校の双方が互いに社会資源として活用し合い，それぞれの事業目的に効果的な役割を果たしていることを確認する。第4節では，「13歳の社会への架け橋づくり事業」から発展した地元中学生と施設入居高齢者との交流に関わる事例である。ここでは，中学校の授業として行われた高齢者との交流事業が，どのような過程を経て日常的関わり合いにまで発展していけたのかを確認する。第5節では，地域の人財育成を施設が行う認知症サポーター養成講座に関する事例である。ここでは，在宅福祉を支えるために施設が担うべき役割について検討する。第6節では，これ

らの事例から浮かび上がってくる特徴をまとめ，本事例の先駆性を「地域と協同し地域住民としての振る舞いを引き出すケア」に見いだしている。

本章で明らかにしたのは以下の内容である。ここで行われている地域の社会資源との協同には，二つのベクトルがある。施設ケアを地域の社会資源と一緒になってケアに関わる協同と施設が人財育成の担い手となって社会資源と関わる協同の二つある。このことは，地域の手を借りてケアすることで，地域の社会資源化でケアすることである。この組み合わせで相互に関連し合いながらケアが行われているところに，地域との関わりを持続的に持ち続けられている要因がある。また，施設ケアを地域との協同の中で行うことは，入居者を取り巻くケア環境が施設内にとどまらずに地域社会に向かって広がりを持って発展していくことである。このことが，常に新たな協同を生み出し拡大していく源となって，施設ケアの新たな姿を醸し出すことにつながっている。この発展過程には，地域住民としての入居者の存在が大きな役割を果たしている。馴染みの関係は，地域住民から入居者に向けられるだけではなく，入居者から地域住民に向けられる関係もある。このような相互の関わりを地域又は社会資源化した施設という場で行うことは，入居者が一人の地域生活者としての振る舞いを賦活化／維持するための意識形成を図る大切な機会になっている。これまで住んでいた地域から切り離さないケアの意味は，そこで培われていた関係性を再構築していくことを意識した関わりにある。うぐいすの里の先駆的ケア実践は，施設ケアに終始せず，施設の地域貢献を端緒にして地域住民や社会資源がケアに関わるケア環境の中に，自立的な入居者の日常を見いだそうと意図しているところにケアの視点がある。

3-4　第4章

第4章は，知的障害者の地域生活を進めるために行政が関与して「共生型グループホーム」を創設し，その一般化を模索している事例である。本施設の特徴は，認知症高齢者と重・中度の知的障害者及びこれまでグループホームでの生活への道を閉ざされていた重度重複障害者とが，共生型グループホームという新たな住まいの場を持つことによって，これまでとは異なる地域生活の様相をつくりだしているところにある。本章の課題は，認知症高齢者と知的障害者が共に暮らす共生型グループホームというケア手法が，地域生活の継続や制度を越える必要性を顕在化させていく過程を整理し，共生という制度を越えたケア手法が地域で暮らす（脱施設化）ことを支える可能性とその意味を明らかにすることにある。

これらの課題に取り組むために，まず，第1節では共生型グループホームが事業化された経緯と背景を整理する。第2節ではモデル事業で試みた新たな生活の場づくりを事業内容に沿って説明する。第3節では認知症高齢者と知的障害者及び重度重複障害者の関わり合いの様子をタイムスタディー手法で観察記録し，関わり合いの持つ影響について検討する。第4節ではモデル事業として取り組まれた共生型グループホームを一般化するためにとられた施策を整理する。第5節では，モデル事業から得た知見を基に，制度を越えたケア手法が地域で暮らすことを支える可能性とその意味を明らかにしている。

本章で明らかにしたのは以下の内容である。共生型グループホームは，認知症高齢者のケアの場であり知的障害者の日中活動の拠点としての住宅である。別の表現をすれば，質の高いケアサービス提供の場としての側面と社会的な役割を獲得する場所としての側面を併せ持ち，日常の生活行為をとおして新たな関わり合いや向かい合いを生じさせる場になっている。認知症高齢者と知的障害者，それぞれの暮らしが重なり合うことによって，全体としては一つの大きな暮らしの流れを醸し出す。両者が共に暮らすことは，他者との関わりを再構築していく集団過程と，各自が集団からの影響を受けて行動変容を起こしていく個人過程が相互補完的に展開することである。他者との関わりは，相互に新しい役割や意味づけを持って，さまざまに変化する活動的な場になっている。認知症高齢者のケアの場，知的障害者の

住宅という存在が，日常の生活行為をとおして新たな社会関係を生じさせる場となり，認知症高齢者，知的障害者双方に自立的な日常生活の営みを生み出す。このことは同時に，ごくありふれた日常生活の営みを際だたせることに結びついている。このような日々淡々とした日常の繰り返しが，予見可能で安心感のある生活基盤を築き，次の一歩を踏み出させる余裕を生み出している。

3-5　第5章

第2章から第4章で取り上げた「地域を取り込むケア」，「地域と協同で進めるケア」及び「制度を越えたケア」の先駆的ケア実践には，当事者と地域住民等の多くの他者との関わりを特徴とする相互行為の存在を知ることができた。この相互行為の持つ意味を明らかにするためには，それぞれの先駆的ケア実践に見られた相互行為が，個別具体に個々人の暮らしぶりにいかなる変化をもたらしているのかを知る必要がある。このことは，それぞれの先駆的ケア実践が目指しているケアの質を知る上で重要な作業になる。このため，本章では，これまで取り上げた先駆的ケア実践のただ中にいる4人の個別具体の日常生活を詳細に観察し，そこで繰り広げられている個々人の暮らしぶりに接近する手法で，先駆的ケア実践で目指しているケアの質を知る手がかりを得る作業を行う。本章の課題は，介護（支援）行為の中で施設，家族及び地域社会の関わりが，個々人の生活にどのような形で反映され，いかなる地域生活を築き上げることに役立っているのかを明らかにすることである。このことをとおして，施設や地域社会及び家族が関わることの意味及びそのようなケア環境で行われるケアは何を目指しているのかについて考える。

これらの課題に取り組むために，できる限り日常性を保った姿を見ることが可能となる参与観察などによって，ごくありふれた日々の様子を観察し，彼らの生き方の表出であるさまざまな振る舞いを時系列的に追うことをとおして，地域で暮らす4人の生活の実像に迫る3編の事例を取り上げる。第1編目は，認知症高齢者が，近隣住民や施設との関わりで安住の地を見いだした「近隣者との関わりで見つけた終の棲家」に関わる事例である。ここでは，地域住民との関わりとその関わりを具体的な形にしていく行政や施設の役割に注目している（第1節）。第2編目は，老人二人世帯の高齢者が，地域を離れることなく暮らし続けた「自宅と施設の二つの生活空間を持つ夫婦の暮らし」に関わる事例である。ここでは，二人で地域に住み続けることを願って，施設を自宅化している夫の姿とその思いを支える施設のあり方に注目している（第2節）。第3編目は，知的に障害を持ちながらも主体的に暮らす「二人の知的障害者の日常」に関わる事例である。ここでは，知的障害者の地域生活を支える新たな住まい方に注目している（第3節）。第4節では，これらの事例から浮かび上がってくる特徴をまとめ，本事例の先駆性を「暮らしの中にある他者との関わりが導く自立」に見いだしている。

本章で明らかにしたのは以下の内容である。事例にある日々の生活に対する向き合い方は，介護保険制度や自立支援制度が描いている「自立」の姿を具体的な形で示している。自立とは本来，自分の人生に主体的・積極的に参画し，自分の人生を自分自身が創っていくことである。自立は，単なる「介護」の範疇にその姿を求めているのではなく，他者との関わりの中で膨らみを増す「楽しい」という感情を持てるところにその姿を見いだしている。自分の生活を楽しむことができるからこそ，潜在していたさまざまな生活行為が賦活化することに結びついていく。このようにして生活行為に広がりを持ち，これまで見せることの少なかった振る舞いが引き出され，どこにでもあるあたりまえの暮らしの様子を見せてくれているのである。自立の行き着くところは暮らしである。この意味で，暮らしの中でこそ「自立」が成り立つのであって，暮らしが自立を生み出し自立を支えるのである。ここで取り上げた，住み慣れた馴染みの場所で他者との関わりを伴った先駆的ケア実践は，このような一人の地域生活者としての自

立の姿を導き出すことに大きな役割を果たしているといえ，ここにこそ，ケアの質が求める姿を見いだすことができる。

4　本論文で得た知見

これまで，異なる三つの先駆的ケア実践の現状とそのことによって導き出された具体的な生活の実像を事例に取り上げ，要援護者を取り巻くさまざまな関わりと要援護者の振る舞いとが織りなす生活模様を主な分析対象として検討した。本論文の締めくくりとなる終章では，要援護者と彼らに関わるさまざまな成員間との関係性を変容させる出来事として把握した先駆的ケア実践の議論を，そこで起きている社会関係の変化とする分析視点でとらえ直し，先駆的ケア実践が創る他者との関わりの持つ今日的意味を明らかにし，新たなケアの質の向上に向けた進むべき道筋を見いだしていく。

終章に取り組むにあたり，はじめに第２章から第４章で取り上げた三つの先駆的ケア実践の持つ特徴と主眼点を整理し（第１節），次に，その特徴は，従来の介護といかなる違いがあるのかを社会関係の視点でとらえ直し（第２節），最後に，そこから本論文の総括となる他者との関わりが導き出す先駆的ケア実践の持つ今日的意義を見いだし，本論文の総括とした（第３節）。

この新たな関わりの姿勢は，単に他者と関わることに留まらずに，その関わりをさらに発展させて，互いにそれぞれの生き方と向かい合うものである。ここにある関わりの機会は，馴染みの関係づくりの場となり，さらなる関わりへの広がりや関係の親密さをつくりだし，他者への興味関心の高まりが，互いの人生や生き方と向かい合う関わりを築いていく。このような関わりを言い表す言葉として，本論文では「関わり合い，向かい合う」との表現を生み出した。

これらの地域生活の実像から浮かび上がってくるのは，地域との関わりを常に視野に置いた協同によって賦活化した「関わり合い，向かい合う」姿である。この「関わり合い，向かい合う」ことの日常化は，身体的，精神的衰えに対して特別な配慮を持って行う介護をそれぞれの暮らしを支えるための「あたりまえ」を求める生活支援としてのケアへの意識転換を促し，穏やかな日常，施設に持ち込んだ夫婦の生活空間，安定した繰り返しのある生活と言うありふれた日常のある暮らしを築き上げる土台になっている。この「あたりまえ」を促し又は引き出すケアの場は，施設であったり，地域であったり，また生活の場を共有にする者どうしであったりとさまざまである。しかし，ケアがいかなる場で行われようとも，常に地域との関わりを意識した生活者としてのケアを展開することで生活の一部となり，このことがありふれた生活行為を引き出し，その日常性がゆえに役割関係を生み出す場づくりへと発展し，役割獲得の機会へとつながっていく。また，この役割獲得は新たな行動を引き起こすきっかけを生み，新たな一歩を踏み出す意欲を引き出し，さらなる「関わり合い，向かい合う」機会を拡大させている。この拡大する新たな「関わり合い，向かい合う」機会は，これまで介護とは無縁であった場所や組織／団体をも取り込み，従来のケア行為の延長線と言う枠組みではとらえきれない関係性をつくりだし，より一般化した関係性となって地域社会へ拡散していく足がかりになっている。ここに，地域との関わりによってつくりだされる「関わり合い，向かい合う」ケアの持つ特徴を見いだすことができる。

こうした新たな視点と特徴を持つケアとの向き合い方は，これまでのケアの質を一歩進め，地域との関わりによってつくりだすケアの質に着目した「関わり合い，向かい合う」ケアと表現できる新たな段階へ歩み始めたといえる。すなわち，本論文で取り上げた先駆的ケア実践は，これまでのケアの質に対する見方を大きく変える，社会関係の再構築としてのケア改革であり，新たなケア環境をつくり出す社会関係の構築への助走の始めの一歩になっている。

論文審査結果の要旨

本論文は、地域社会のもつさまざまな関係性を介護現場へと取り込もうとする宮城県内の先駆的実践を対象事例とし、その詳細なモノグラフ的研究によってその実態を精緻に描きだすとともに、その分析のなかから、身体介護の変革のレベルにとどまりがちな従来の議論に対して社会関係の再構築こそがケア改革の本質であることを明らかにした。

まず第１章において、現行の福祉制度のもとで「ケアの質」がどのように扱われてきたかが検討された。その結果、ケアの質をめぐる政策的な論議が身体介護のレベルにとどまってきたことが明らかにされた。第２章から第５章にかけては、宮城県内の介護現場における事例研究がまとめられている。第２章では、富谷町の「杜の風」での実践が検討された。この施設は、全室個室でユニットケアを採用した「新型特養」であり、従来は、この施設のハード面の先駆性がもっぱら注目されてきたが、地元の町内会とのかかわりを、時間をかけて構築していくなどの地域社会との相互的な取り組みにこそ画期性があることが、事例の詳細な記述によって明らかにされた。

第３章では、鶯沢町（現・栗原市）の特別養護老人ホーム「うぐいすの里」の事例が検討された。この章では、地元小学校との交流事業などを題材に、日常的な社会関係が施設に居住する高齢者と地域住民のなかに成立する状況が描きだされた。

第４章では、白石市の共生型グループホーム「ながさか」の事例が検討された。これは、認知症高齢者と知的障害者が一緒に生活するという取り組みであるが、そうした異なったタイプのひとびとが生活することによって、双方に自立的な日常生活の営みが生みだされうることが明らかにされた。

第５章では、これら三つの施設にかかわる利用者の日常生活の状況が、その相互行為に着目することによって、明らかにされた。それによって、施設の利用者は、たんなるケアの受け手にとどまらず、地域生活者として暮らしうる可能性が描きだされた。

これまで社会学のケア研究は、ケア提供者とその受け手という二者関係を暗黙のうちに前提としてきた。本研究はその前提そのものを問いなおし、地域社会のもつ多様な関係性を取り込む実践に着目することで、三人称の視点をケアにかんする社会学的研究に取りいれることに成功している。このことは、福祉社会学の発展にとって重要な寄与をなすものと評価できる。よって本論文提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。